

3. 3. 1

佐倉市

教育センターだより Vol.53

令和3年3月1日発行／佐倉市教育センター／TEL. 043(486) 2400 http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/13-6-0-0_6.html

かかわり続けた先に…



教育センター相談室

佐倉市教育センター所長 榎 本 泰 之

中学校時代に不登校を経験した教え子が、近況と4月からの働き先について報告にきてくれました。彼女は、中学2年の途中から不登校になり、卒業証書も学校で受け取ることができなかった生徒です。当時のことを振り返り、その頃の心境などを教育センター相談室で、次のような手記にしてくれました。



手記 ※ 教育センター相談室にて（一部抜粋）

不登校のきっかけは、当時所属していた部活動での人間関係でした。中学2年生の5月頃から仲の良かった友達が少しずつ遠ざかるようになり、その1人が同じクラスだったこともあり、学校に行くのが辛くなりました。友達が遠ざかるようになった理由は今でもわかりません。私も何か悪いことをしたのかと思い、その友達に聞いてみましたが何もわからず、毎日悩み、辛い日々が続きました。ある時、自分の辛い状況を学年の先生のところへ相談に行こうとしましたが、先生は忙しそうだったため、なかなか相談できずに時間が過ぎてしまいました。その後も友達との良くない関係が続き、どうしても耐えられなくなり、そのまま学校に行けなくなりました。自分から勇気を出して先生に相談し、母親にも伝えれば良かったと思っています。しかし、当時はそのような気持ちになれませんでした。特に母親には心配をかけたくないという思いがあって、辛い状況を話すことができませんでした。母親は学校に行き、顧問や担任の先生と話をする機会が何度もありました。先生方も家庭訪問や電話をしてくれましたが、人と接するのが怖いのと、学校に行けないことへの罪悪感があり、私はどうしても先生方に会うことができませんでした。

その後、校内適応指導教室の先生が週に何度も家庭訪問をしてくれるようになりました。徐々にその先生とは話ができるようになりました。また、しばらくして教育委員会の適応指導教室に行けるようになりました。3年生の2学期の途中からは校内適応指導教室にも行けるようになりました。これまで会うことができなかった担任の先生ともなんとか会えるようになりました。しかし、10月のある日、私にとって大きな出来事がありました。その日は担任の先生と少し会って帰宅する予定でしたが、話をしているうちにクラスの様子が気になり、勇気を出して教室へ行ってみることにしました。しかし、教室が近づくにつれて、自分でもわからないくらい緊張し、ドアを開けて中に入ると恐怖で涙が止まりませんでした。「みんなは私のことをどう思っているのだろうか。」「ずっと休んでいたのに急に教室に来て、変に思われないだろうか。」など、たくさんの方が頭をよぎり、気持ちをコントロールできなくなりました。それを最後に、学校に行くことができなくなりました。今考えると弱かった自分を情けなく思うし、顧問や担任の先生、中学校の先生方にもとても迷惑をかけたと思います。もっとがんばらないといけないと毎日のように思っていましたが、当時はどうすることもできませんでした。正直、中学校にも行きたかったし、部活も最後までやりたかったです。もしできるなら、中学校生活をもう一度やり直したい気持ちです。こんな私でしたが、先生方が手紙をくれたり、家庭訪問をしてくれ、なんとか高校へ進学することができ、高校卒業後は専門学校にも進むことができました。人と接することはまだ苦手ですが、これから中学校1年生までの自分に少しでも近づけるように頑張り、一生懸命働きます。当時、私を支えてくれた、顧問や担任の先生、中学校の先生方、そして校内適応指導教室や教育委員会の適応指導教室の先生方には本当に感謝しています。先生方の力がなかったら、今の自分はないと思います。これから先生方や両親に少しでも恩返しできるように頑張ります。

彼女が再度不登校となった後、これまでの対応を振り返り、学校と教育委員会が連携して学校復帰を果たせるように懸命に努力しましたが、その願いは叶いませんでした。一旦不登校になると、学校復帰を果たすまで多くの時間を要します。中には学校復帰を果たせず、彼女のように卒業式も出られない子どもたちもいます。しかし、教師がその子どもたちの気持ちに寄り添い、粘り強く支援していくことで、すぐには結果が出なくても、数年後に成果として現れる子どもたちも多くいます。不登校の要因は学校生活、本人の問題、家庭生活や社会的背景など様々です。大切なのは、早期に対応することと、不登校になった要因を紐解き、子どもたちの心情を汲み取りながら、長い時間をかけてじっくりと関わっていくことだと思います。関わった時間が多ければ多いほど、子どもたちに必ず良い影響を与えます。別れ際に彼女は次のような話をしていました。「当時、私は学校に行きたくても行けず、このままどうなってしまうのか毎日不安で仕方ありませんでした。中学校の頃が私にとって一番苦しい時代でしたが、先生方のおかげで今があります。これから先は良いことがたくさんあるように自分らしく頑張ります。」と。明るく笑顔で話をする彼女の言葉を聞いて、教師の責任の重さを痛切に感じました。そして、子どもたちにとって一生に一度の学校生活を素敵にすることが、我々教師の務めだと改めて実感しました。

教育センターでは2つの適応指導教室の運営を行っています。通級している不登校の子どもたちの心は敏感で、日々対応が異なります。適応指導教室の先生方も何とか学校復帰が果たせるように、日々懸命に支援しています。今後も、学校との連携を大切にし、不登校になった子どもたちへの最善の方策は何なのか模索しながら、全力で取り組んで参りますので、よろしくお願いいたします。

適応指導教室の今

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を考慮し、適応指導教室も様々な制限がある中、運営を続けています。そんな適応指導教室でのいくつかのエピソードを紹介します。

入級したばかりの頃は、漢字や英単語練習など一人だけで進めることができるのに取り組んでいた子どもも、周りの子どもたちが算数・数学科や社会科の分からぬところを聞きながら一生懸命理解しようとしているのを見ているうちに、「私も勉強が分かるようになりたい。」と相談員に質問をするようになってきています。自分で学習を進めていく力が少しずつ育ってきています。



今年度は、校外学習も体験活動も中止しました。通級も午前か午後のどちらか一方の通級が原則です。そんな中、休み時間に流行っているのがけん玉です。たった10分の休み時間の中でも上達が見られ、子どもたちは様々な技ができるようになってきました。技を見せ合う中で子どもたち同士のコミュニケーションも生まれてきています。



適応指導教室の小さな学習室は子どもたちにとって自分を見つめ直すことができる場所のようです。朝起きて、適応指導教室に来て、勉強をして帰宅するという時間の流れの中で、生活リズムが作り直され、次のステップが見えてきます。いつもと違う環境の中で一人になっていろいろと考えることでスッキリとした表情で学習室を出てくる子どもたちもいます。



勉強の合間の卓球は大切な時間になっています。短い時間の中ですが、運動は心がほぐれ、会話も生まれます。顔を赤くしながら学習室に戻る子どもたちからは笑顔が垣間見られます。

限られた時間の中のメリハリのある生活が、子どもたちの今後の生活の手掛けりになっているようです。



P D C A サイクルを活用した佐倉市学習状況調査の活かし方 ～児童生徒の基本的な知識・技能の定着と活用力の向上を目指して～



Plan (計画)



出題の基本方針や出題意図から学習指導の工夫・改善を考える。

- 【例】
- 国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」について、漢字は定期的に練習や確認の時間をとりますが、その他の内容は1度やったきりになってしまふことも…。到達度調査の実施を機会に、系統的に復習し、定着を図ったうえで次年度の学年につなげるようとする。
 - 数学では、前の学年の内容から出題される学年もあります。学習内容を考え、前の学年の内容と合わせて学習した方が、定着度が高まると考えられる部分を、到達度調査の実施を機会に学び直す。

Do (実行)

工夫・改善した教科指導の実施

調査問題は、小学校1年生から中学校2年生は12月までの学習内容、中学校3年生は11月までの学習内容です。調査問題への取り組みを通して、これまでの学習で理解が曖昧な部分の定着を図り、次年度の学習へつなげていくことができます。



Action (改善)

結果を利用して児童生徒の復習の手立て、教員の指導方法の改善に役立てる

- 【例】
- 採点が終わった調査用紙を配付し、その場で間違い直しを行う。
 - 正答率が低い問題は、教科書の該当部分を参照しながら解説する。これまでの学習と今後の学習とのつながりを知ることで、児童生徒の家庭学習の工夫・改善を促すこともできる。
 - 佐倉市全体と自校の正答率を比較し、児童生徒の実態に合わせた指導方法の工夫・改善を図る。





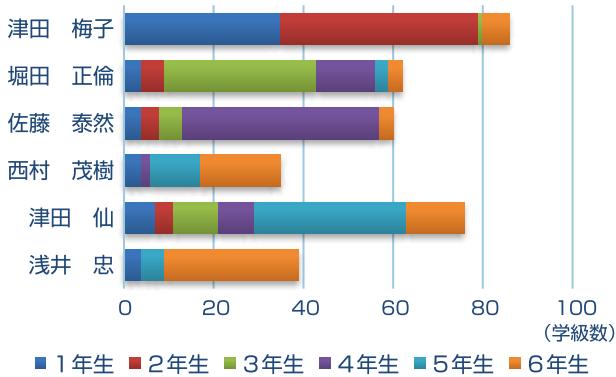
佐倉学道徳 ~佐倉ならではの道徳教育の充実をめざして~

佐倉学道徳には、佐倉学道徳副読本『佐倉の道徳』を活用して行う学習と佐倉の地域の歴史、自然、人物、文化に関するものをデジタル配付している『道徳教材』があります。

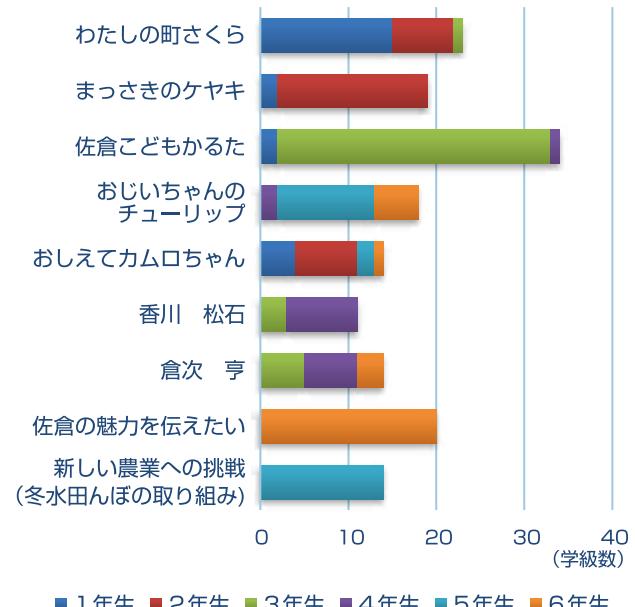
児童生徒にとって身近で親しみのある地域や先人の生き方から、道徳的諸価値の追究や自己の生き方について考えを深めることができるように、また、新学習指導要領の内容を踏まえたものにするなど、佐倉学道徳教材検討委員会において、新教材の開発やこれまでの資料を改訂しています。佐倉学道徳をとおして「考え、議論する道徳」の授業実践ができるよう、教育センターとして支援していければと思っています。

～佐倉学道徳副読本『佐倉の道徳』・『道徳教材』活用状況調査の結果(令和元年度)～

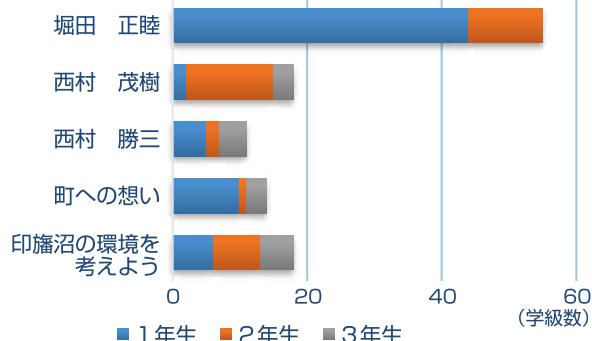
〈副読本『佐倉の道徳』活用状況〉



〈デジタル配付の道徳教材活用状況〉(小学校)



〈副読本『佐倉の道徳』活用状況・デジタル配付の道徳教材活用状況〉(中学校)



佐倉学道徳では・・・

- ① 郷土の先覚者から生き方を学ぶ
- ② 佐倉市の自然や環境から学ぶ



結果より

- 小学校・中学校ともに、実践した学級数が前年度と比較して増加している。
- 副読本は低・中・高学年、中学校別に作成されているが、これらの教材を学校ごとに工夫し、幅広い学年で活用されるようになってきている。
- △教科書の教材と差し替えるだけの効果があるようには、教材研究や授業の工夫が必要になる。
- △新学習指導要領の内容に合致するよう、指導案の改善や指導資料の充実を図る必要がある。

郷土佐倉への愛着を育み、社会に貢献できる人材の育成をめざしています。

佐倉の先人の生き方・考え方を題材とし、児童生徒の内面に根ざした佐倉ならではの道徳教育の充実をめざしています。





令和2年度コロナ禍の就学相談の傾向について



幼稚園等より、小学校へ就学することは、本人はもちろん保護者にとっても大きな出来事です。就学相談については、平成24年、中央教育審議会初等中等教育分科会から報告された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」で、次のように述べられています。

（1）早期からの教育相談・支援

- 子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援を保障するためには、乳幼児期を含め早期からの教育相談や就学相談を行うことにより、本人・保護者に十分な情報を提供するとともに、～中略～ 本人・保護者と市町村教育委員会、学校等が、教育的ニーズと必要な支援について合意形成を図っていくことが重要である。」

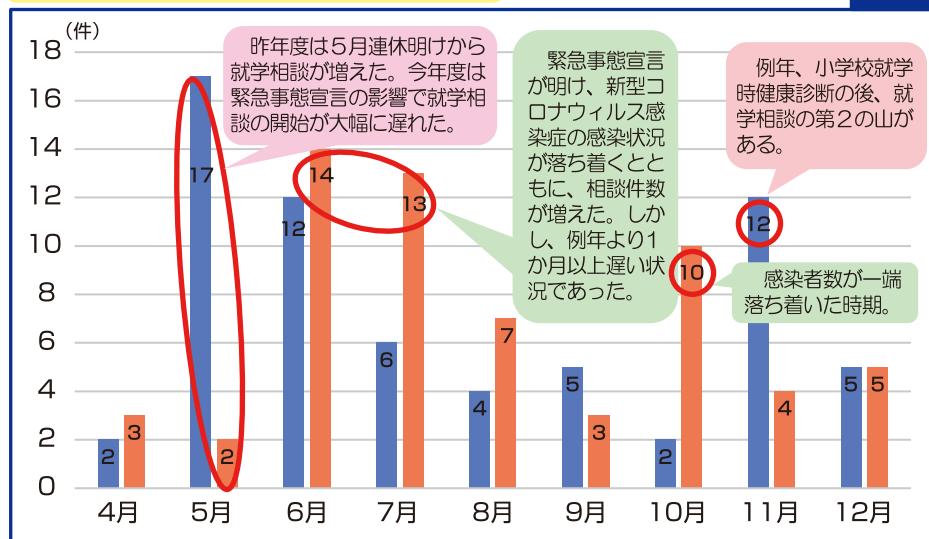
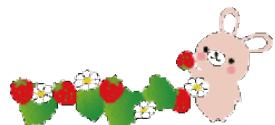
障害の有無に関わらず、早期に就学相談を行うことで、多くの情報を得ることができるとともに、学校と連携しながら、相談、特別支援学級及び特別支援学校の見学、体験等を行うことができます。また、ご家族でゆっくりと就学について考え、相談することができます。

ところが、今年度は、新型コロナウィルス感染症拡大により、様々な影響が見られました。そこから見えた影響について、本ページでお伝えしていきます。

昨年度との就学相談月別数比較

R元 R2

図1



この2年間を比較すると、相談開始時期に1か月のずれが見られました。この遅れにより、学校の見学、特別支援学級の体験も同じように遅れています。通常の学級、特別支援学級のどちらに籍を置いてスタートすることが子どもたちにとってよいのか、検討するための時間が短くなってしまう傾向がありました。

また、各小学校で1月下旬から2月上旬にかけて行われる入学説明会の時期に、未だ学びの場が決まっていないケースもあり、不安を抱えて再相談があるのも今年度の特徴です。

小学校特別支援学級見学数比較

図2



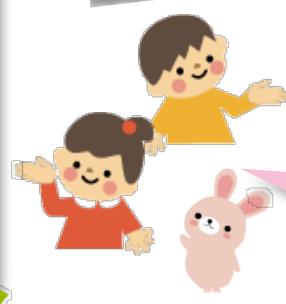
小学校特別支援学級体験数比較

図3



例年、教育センターでの就学相談を皮切りに、学区の小学校見学、小学校特別支援学級の体験をし、家庭での検討へと進んでいきます。しかし、今年度は、相談開始が遅れ、さらに10月まで初回の相談が続きました。例年であれば見学後、比較的短期間で体験を行っていくのですが、体験の開始が遅れ、10月に集中しています。10月は小学校側の行事が重なり、思うように日にちの確保ができず、体験が遅れてしまった家庭もありました。

ぜひ、就学相談にお越しください



就学先の決定は、大事なお子様の小学校生活第1歩で、大切な決断です。通常の学級、特別支援学級それぞれに良さがあります。何よりもお子様が毎日楽しく学校に通い、学べるよう、最も適切な学びの場を十分にご検討ください。